



Osaka Gakuin University Repository

Title	suddenly 考 (4) On <i>suddenly</i> : Part 4
Author(s)	黒宮 公彦 (Kimihiko Kuromiya)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 75 号 : 1-18
Issue Date	2018.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

suddenly 考 (4)

黒 宮 公 彦

1

黒宮 (2016, 2017a, b) に引き続き、suddenly には「状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合の2つの用法があるという仮説を検証していく。そのために be と suddenly が共起している文における suddenly の振る舞いについて、British National Corpus (以下 BNC と略記する) を使ってランダムに抽出した578例を対象に調査する。

2

黒宮 (2016) の繰り返しになるが、578例中 suddenly が実際に be を修飾していたのは239例のみだった。このうち suddenly が < be + 形容詞 > を修飾している例については黒宮 (2016) で、< be -ing > を修飾している例については黒宮 (2017a) で、< be + 過去分詞 > および < be + 名詞句 > を修飾している例については黒宮 (2017b) でそれぞれすでに詳しく見た。本稿では「存在を表す be」を suddenly が修飾しているものを中心に考察する。

2.1 存在を表す be

suddenly が存在を表す be を修飾しているものが一部観察された。具体的には239例中32例が該当した。

2.1.1 there 構文と suddenly との共起

suddenly が存在を表す be と共起している32例のうち22例はいわゆる「there 構文」、すなわち “there be NP” というパターンを持つ文中に suddenly が現れているものだった。そのうちの大部分（具体的には20例）では suddenly が there の直前に置かれており（うち1例では suddenly と there の間にコンマが挿入されている）“suddenly there be NP” というのが基本パターンなのだと考えられる。しかもそのうち12例は suddenly が文頭に置かれた、つまり “Suddenly there ...” で始まる文だった。さらに詳しく述べると20例の内訳は、文頭の “Suddenly there ...” が12例、and の直後に suddenly が置かれた “... and suddenly there ...” が4例、but の直後に置かれた “... but suddenly there ...” が2例、when の直後に置かれた “... when suddenly there ...” が2例という結果だった。文頭でなければ接続詞の直後、言い換えると節の初めに置かれていることが見て取れる。副詞が置かれる最も一般的な位置は、動詞が be であればその直後、一般動詞であればその直前、もしくは文末であり、副詞を文頭に置くのはその副詞を取り立てて強調する意図のある場合だ¹。この点を考え併せると、suddenly が there 構文と共起する場合には suddenly をことさらに強調するのがむしろふつうなのだとと言える。

ここで問題となるのは there 構文中の存在物、すなわち「何が存在していることを表している文が多いか」である。別の言い方をすれば “there be NP” の NP にはどのような名詞が現れるかということだ。以下この点について見ていこう。まず語のレベルでは、commotion（騒ぎ、騒動）が2例見られたが、それ以外はすべて1回のみ現れているものばかりだった。

- (1) a. Suddenly there was a commotion behind me. (BNC: CHE)
 b. Suddenly there was a commotion, confusion and curses as an empty cart overturned, the horse plunging and rearing in its traces with no sign of

the driver.

(BNC: BMN)

わずかな例文中に2例も見られたということは“suddenly there was a commotion”は決まり文句と考えていいのかもしれない。

さて、語のレベルで見るとまとまりがないので、次にいくつかのカテゴリーにまとめてみた。すると<音>が11例(後に述べる(4a)の例も含める)と多数を占めた。

- (2) a. Suddenly there was noise. (BNC: HPR)
 b. Suddenly there was a loud scream behind him. (BNC: FRK)
 c. Suddenly there was a faint ring on the bell downstairs[.]
 (BNC: FRK)

現実世界で音が突然生じるのは自然なことであり、suddenly が共起するのはむしろ当然のことと思われる。問題があるとすればそれは suddenly ではなく be もしくは there 構文なのであって、この場合の be は「存在」というよりはむしろ「出現」を表すと考えるべきだろう。実際、日本語なら「音が『ある』」ではなく「音が『する』」と表現するところだ。黒宮(2017b)では<be + 過去分詞>は状態受動を表す場合と動作受動を表す場合とがあることを確認した上で、<be suddenly + 過去分詞>は基本的に動作受動を表すと述べた。こうしたことから分かるように be には「ある」、つまり存在を表す用法とともに「なる」、つまり出現や変化を表す用法もあるので、suddenly と共起したとしても驚くに当たらないことが多い。これは<be suddenly + 形容詞>にも当てはまることで、黒宮(2016)で確認したように<be suddenly + 形容詞>の73例でも状態変化が生じている例が多数を占めた。また上で触れた commotion も、騒ぎが突然起きるのはふつうにあることなのだから、出現・変化を表す be とともに用いられていると言える。

なお、「無音」の例も1例だけではあるが見られた。無音もまた<音>の一種だと見なすならば<音>は12例ということになる。

(3) THE 26 August 1989 edition of *Do i Posle Polinochi* [*sic.*], the popular late-night television magazine was offering its usual mixture of chat and interviews when suddenly there was a pause. (BNC: A4X)

話をしている人が突然黙るのはふつうのことであり、テレビ放送であれば故意に休止を挟むことも可能である。よってこれも *be* が変化を表している例である。黒宮 (2016) で述べたように *suddenly* が *be quiet* を修飾しているものが2例、*be silent* を修飾しているものが1例見られたわけだが、それらと類似の例だと言える。

次に、明暗や色といった<視覚で捉えるもの>が4例見られた。<音>を「聴覚で捉えるもの」と見なせば両者は類似の例だと考えることができるかもしれないが、実際には必ずしもそうではない。

(4) a. Suddenly there was a flash of lightning and a roll of thunder[.] (BNC: ACK)

b. She had yellow and blue and suddenly there was green. (BNC: K5F)

c. Suddenly, there was a chink of light at the end of what had previously looked like a dead-end tunnel. (BNC: K5M)

(4a) は稲妻と雷鳴が突然出現したことを表しており、前者は<視覚で捉えるもの>の例だと言える。また後者は<音>の例であり²、いずれも突然の出現、すなわち状態の変化を表している。これは (4b) でも同様で、黄色と青を混ぜたら緑になったという状態の変化が生じている。こうした出現や変化を表

す **be** と **suddenly** とが共起している例は確かに <音> の例とよく似ていると言える。

ところがこれは (4c) には当てはまらない。(4c) で、トンネルの反対側には初めから光が差していたはずである。トンネルは途中で行き止まりになっている、言い換えるとその反対側は塞がっているように見えたというのは認識者の思い込みにすぎないのであって、塞がっていたところに突然穴が空いたわけではない。つまりこれは認識の変化を表す **suddenly** の典型的な例である。

視覚に訴えるものの場合認識者の目に入らないと見えない。例えば自分の背後にあるものや何かの物陰に隠れているものは、以前から存在していたとしても、目に入らなければその存在に気づかない。これに対して音は背後や物陰など、音源が見えないところや比較的離れた場所にあっても問題なく耳に届く。<音> の場合は状態変化であるのに対し、<視覚で捉えるもの> の場合は認識の変化のこともあり得るという両者の違いの裏にはこうした原因があると考えられる。この考えをもう一歩進めると、**suddenly** が認識の突然の変化を表すと解釈されるためには以下の2点が重要だと言える。

(5) a. 状態変化が突然生じるとは考えにくい事柄であること。

b. 状態変化が生じた瞬間に確実に知覚される事柄ではないこと。言い換えると状態変化が知覚されないこともあり得る事柄であること。

このように考えると認識の突然の変化と <視覚で捉えるもの> とが結びつきやすいことが納得できる³。同時にまた <視覚で捉えるもの> とは明暗や色といったものに限定される必要はなく、人間は外部世界における極めて多くの事象を視覚で捉えているのだから、物体の存在など、突然状態変化が生じることがふつうでない事柄は認識の変化と結びつきやすいと言える。ただし **suddenly** と共起している **there** 構文が物体の存在を表している例はほとんど見られなかった。(6a) はその珍しい例である。

- (6) a. Soon cool air began to reach me, and suddenly there was the sea.
(BNC: FSJ)
- b. Brazilian music can usually be found only on specialist world-music labels, but suddenly there are three compilation albums released by the majors.
(BNC: AA9)
- c. Then there is a cessation of acceptance and suddenly there is, er almost revulsion that steps in.
(BNC: KGP)
- d. And suddenly there was a darkness about his demeanour.
(BNC: JXS)
- e. Suddenly there was a new authority in his voice.
(BNC: CH9)

(6a) は suddenly が認識の突然の変化を表している典型的な例である。もっとも there 構文 “there be NP” の NP は不定の名詞であることが基本であり、定冠詞を伴った名詞を含んだ (6a) は厳密には there 構文とは呼べないかもしれない。また (6b) は形式上は there 構文だが、実質的には “suddenly three compilation albums have been released” と同義であり、黒宮 (2017b) で取り上げた suddenly が < be + 過去分詞 > を修飾している例に近い。そして (6b) も黒宮 (2017b) で見た例と同様、状態変化を表している。

(6c-e) は黒宮 (2016) で述べた「人間の内面における変化」と関わっている例である。とりわけ (6d, e) は黒宮 (2016) で論じた「物理的な状態変化」と「人間の内面における変化」の二重構造になっている例だと言える。いずれにせよ文中の名詞は物体を表しているわけではなく、there 構文も状態変化を表している例である。

以上をまとめると、suddenly と there 構文とが共起している場合、there 構文 (もしくは be) は状態変化を表していることが多い。ただし there 構文内の名詞が「目で見て存在を確認するもの」(具体的な存在物のみならず、光や色なども含む) の場合には認識の変化を表すことがある。

2.1.2 存在を表す be と suddenly とが共起するその他の例

すでに述べたように suddenly が存在を表す be と共起しているのが32例、うち there 構文と共起しているものが22例だった。本節では残りの10例を扱う。

実のところ、there 構文内に用いられていれば be は存在を表していると容易に判断できるが、そうでない場合はどうしても直観に頼らざるを得ない。それでも基本的には<名詞 (=主語、存在物) + be + 存在場所を表す副詞相当語句>というパターンに当てはまるものをここに分類した。ここでいう「副詞相当語句」とは主に there もしくは前置詞句である。このパターンに当てはまらないのは次の (7a) のみだった。

- (7) a. Suddenly the ebullient performer was no more. (BNC: J0W)
 a'. Suddenly the ebullient performer disappeared.
 b. [...] Laura had realised that she was suddenly and magically in love, for the first time in her life. (BNC: JXX)

(7a) を杓子定規に <suddenly NP be Adj> というパターンだと見なすことも可能ではあろうが、筆者はやはり「存在」(より正確には「存在しないこと」)を表す文だと考えたい。すると be は存在を表しているが存在場所は明示されていない珍しい文だということになる。もつとも (7a') とほぼ同じ意味を表していると考えれば自然な文である。つまり「存在」を表しているが存在場所が明示されていない文というのは珍しいが、「存在しないこと」を表している文であれば存在場所が示されていなくとも不思議ではない⁴。

逆に (7b) は<名詞 + be + 前置詞句>というパターンに当てはまるのでここに分類した。“in love” が「存在場所」と言えるかどうかは判断の難しいところだが、「自分が現在置かれている状況」を比喩的意味で「場所」と捉えた表現だと考える。

なお suddenly の位置だが、これら10例のうち文頭に置かれているものが6

例、*but* の直後に置かれているものが1例で、やはり *suddenly* を強調しているように感じられる例が多い。

また主語は10例中7例で<人>だった。これは *there* 構文内に<人>が現れた例が1つもなかったことと対照的である。すでに述べたとおり *there* 構文に現れる名詞句は不定のものであることが基本であり、逆に *she* や *John* といった代名詞・固有名詞は特定の人物（通常旧情報である）を指すのだから、この結果は驚くに当たらない。(8a, b)に見るように文中に *there* が現れているものが2例あったものの、“*there be NP*” という *there* 構文のパターンからは外れている。旧情報は文の前の方に置かれるのが自然だからである。他方 *there* が現れていない例には (8c, d) やすでに見た (7a, b) が該当する。

- (8) a. I had an easy 2 hour labour and there I suddenly was, holding my beautiful baby daughter Danielle in my arms[.] (BNC: ANM)
- b. Neither of them had heard the door open, but suddenly Tom was there, and it was clear that he had heard Faye's last words. (BNC: H9H)
- c. Suddenly he was in the enemy's trench and staring down into a young German's eyes, a terrified boy even younger than himself. (BNC: K8T)
- d. Then, quite suddenly, we were out of the jungle and into the daylight[.] (BNC: H89)

人間は突然現れたり消えたりするものではなく、またその存在は多くの場合視覚によって確認されるのだから— (8b) で「音が聞こえなかったこと」が強調されているのは興味深い— *suddenly* は基本的に認識の突然の変化を表していると考えられる。換言すると「気づいたらいつの間にか（ある人がいた）」という状況を表すということである。これは (5) で見た基準とも合致する。

(8d) については主語が *we* であり、状態変化（つまり存在場所の移動）が生

じているのは間違いないが、それでも人間がジャングルから日の当たる場所へと瞬間移動することはあり得ないので、変化は漸進的だったはずである。それが suddenly だと感じられるのはやはり認識の変化の問題であろう。類例としては (6a) や黒宮 (2016) の (16) が挙げられる。

なお黒宮 (2017a) の (7c) で挙げた例文を (9a) に再掲する。これも主語が〈人〉である点で (8) と通じるものがある。

(9) a. Her softened tone said she thought that this was very sweet of him, if a little unnecessary... and suddenly Tom himself was standing behind her and draping a light hand around her bare shoulders. (BNC: H9H)

b. Sara asks, suddenly standing over me. (SYH, p.241)

(9a) で用いられている動詞は be ではないが、stand は「立った状態で」という付帯状況を述べる役割しか果たしておらず、これが “suddenly Tom himself was behind her” だったとしてもさして意味は変わらない。つまり黒宮 (2017a) でも述べたとおりこの “was standing” は実質上存在を表していると考えられる。そして suddenly はやはり基本的には認識の突然の変化を表していると言える。類例としてもう 1 つ、(9b) を挙げておこう⁵。こうした例から存在を表す be のみならず be standing も suddenly と共起し得ること、その場合も suddenly は認識の突然の変化を表すことが確認できる。

2.2 まとめ

この節をまとめると次のようになる。suddenly が存在を表す be と共起する場合、文全体は there 構文、すなわち “there be NP” の形を取ることが多い。この場合 be は存在よりもむしろ出現を表すのが基本であり、suddenly は状態変化が突然であることを表すことが多い。加えて NP は〈音〉を表すものが多い。ただし NP が〈音〉でない場合は suddenly が認識の変化が突然であ

ことを表している例が散見される。

他方、存在を表す *be* が “NP *be* PP” の形を取る文中で用いられ、それが *suddenly* と共起している例も少なからず存在する。この場合の NP は <人> を表すものが多く、*suddenly* が認識の変化が突然であることを表している例が多く見られる。

3

すでに黒宮 (2016) で詳しく述べ、また本稿の冒頭でも触れたが、本研究の調査対象とした578例中 *suddenly* が実際に *be* を修飾していたのは239例のみだった。これは逆に言うところ「同一の文中に *be* と *suddenly* とが現れてはいるが、*suddenly* が *be* を修飾しているわけではないもの」が578例中339例を占めたということである。ではそうした339例では *suddenly* は何を修飾しているのだろうか。本研究の最後にこの点について見ておこう。

ただし調査対象の578例はあくまでも「同一の文中に *be* と *suddenly* とが現れる文」という特殊な条件の下で集められた例であることには注意しなければならない。特殊な条件付きの例文を通して得られた結果が条件の付かない *suddenly* 全般の振る舞いであるかのように敷衍されてはならない。以下に述べることはあくまでも参考の範囲に留められるべきであり、何らかの結論を導くものではないことをあらかじめお断りしておく。

3.1 *suddenly* と共起する動詞

suddenly が *be* 以外の動詞を修飾している場合、当然のことながら修飾している動詞は多岐にわたる。逆に言うとそれは1回か2回しか現れない動詞が多いということでもある。実際1回しか現れない動詞は339例中87例、2回しか現れない動詞は23例を占めた。

以下に頻度の高かった動詞を挙げる。

(10) a. 10回以上 (5 動詞) = realize (22回)、feel (16回)、find (15回)、stop (11回)、come (10回、“come up”、“come into existence” 各 1 例を含む)

b. 7～9 回 (6 動詞) = say (9 回)、seem (9 回)、become (8 回)、see (8 回)、get (8 回、“get up” 2 例を含む)、hear (7 回)

c. 3～6 回 (19 動詞) = appear (6 回)、die (6 回)、occur (6 回)、think (6 回)、turn (6 回、“turn on”、“turn out”、“turn round” 各 1 例を含む)、know (5 回)、remember (5 回)、disappear (4 回)、discover (4 回)、drop (4 回、“drop dead” 1 例を含む)、fall (4 回)、leave (4 回)、open (4 回)、want (4 回、“want to be”、“want to know” 各 1 例を含む)、burst (3 回)、close (3 回、“close down” 1 例を含む)、go (3 回、“go off” 1 例を含む)、lose (3 回)、produce (3 回)

これを見てまず目に付くのは **realize** の圧倒的な多さである。黒宮 (2016) で述べたように本研究の出発点は (11a) (黒宮 (2016) の (1a)) は (11b) (同じく (5)) と言い換えられるのではないかということだった。

(11) a. Ann was suddenly hungry[.] (SGT, p.405)

b. Ann suddenly realized that she was hungry.

すでに述べたように (10) のデータはあくまでも参考程度にしかならないが、それでも **suddenly** は **realize** と共起することが多いと予想される。そしてこれは以下の 2 点を意味する。すなわち、第一に「認識の変化が突然生じる」という事態は珍しいものではないということ。そして第二に、(11a) に見るように「突然生じたのは認識の変化なのだ」ということが非明示的に表現されることもあるが、明示的に表現されることももちろんあって、その場合には **realize** が用いられることが最も多いということである。さらに言えば **feel**、

find、seem、think、remember、know 等も認識（の変化）を表す動詞であり、頻度も高い。本研究では suddenly には「状態変化が突然であること」に加えて「認識の変化が突然であること」を表す用法があると主張してきたわけだが、(10)に見る realize を始めとする一群の動詞の頻度の高さは、この主張を裏付けるとは言えないまでも、仮説の妥当性を暗示していると受け止めることはできるのではないか。

become が 8 例見られたことも興味深い。(11a)の文についてどう思うかイギリス人母語話者に尋ねたところ「“Ann suddenly became hungry.”の方が自然だ」という回答を得た⁶。suddenly は「変化が突然であること」を表すのだから be よりもむしろ become と相性がいいというのは納得できる。ことによるとこの傾向は「認識の変化が突然であること」を表す用法においてより強まるのかもしれない。

もう一点、(10)のデータを見る限りでは「意図的に行われる動作」よりも「非意図的な動作」を表す動詞の方が多く見られる傾向があることを指摘しておきたい。suddenly について考える際には動作の意図性も重要な要素となることは黒宮 (2017a) の (6) でも触れたが、我々にとって非意図的な動作の方が「突然のこと」と認識しやすいのかもしれない⁷。

最後に know が 5 例見られたことに触れておこう。実際には 1 例は “have to know” の形で用いられていたのが厳密には know の例だとは言えないかもしれないが、それを除いても 4 例であり、比較的高い頻度だと言える。さらに want の例に含めた “want to know” にも know が現れていることにも注意すべきだろう。ここで思い出されるのは黒宮 (2016) の (6) で引用した Comrie (1976) の次の一節である。

(12) Know thus differs from *realise*, which refers explicitly to entry into a new situation, and can be used in the Progressive (*he's slowly realising what's happening*).
(Comrie 1976:20)

ここでは **know** が **realize** と対比されており、**know** が基本的に「知っている状態」を示すのに対し、**realize** は「認識していない状態」から「認識している状態」という新たな状況への移行を示す動詞だと述べられている。だからこそ上で確認したように **realize** は **suddenly** と共起できるし、そのような実例は多い。しかしそうであるなら同じ理屈で **know** は **suddenly** と共起しないことになるはずだが、(10) のデータはその逆を示している。これは矛盾しているように思われるかもしれないがそうではない。黒宮 (2016:2-3) で言及したように、動詞の完結相と非完結相とが形態上区別される言語においては、一部の動詞、とりわけ状態動詞の完結形が起動相を示すことがあると Comrie (1976:19-20) は述べている。その上で Comrie (1976:20) が挙げているのが “suddenly he knew what was happening” という例なのだが、ここでも **suddenly** が用いられていることは注目に値する。ここから黒宮 (2016:3) は状態動詞の完結形のみならず **suddenly** も状態動詞を「状態への移行を表すもの」へと変化させる効果があると考えた。そして本研究はこの枠組みに基づき **suddenly** と **be** との共起について分析してきたわけである。そうであるならば状態動詞 **know** が **suddenly** と共起するのは自然なことだと言えるであろう。ただし **know** が通常と違って「知っている状態」ではなく「知らない状態から知っている状態への移行・変化」を表している点には気をつけなければならない。

4

本研究をまとめると以下のようなよう。

suddenly と **be** とが共起する場合、**be** が「状態」や「存在」を表すことは少なく、「状態変化」や「出現」を表すことの方が圧倒的に多い。これはとりわけ **be** + 過去分詞 > が **suddenly** と共起する文で顕著である。けれども数は少ないが **suddenly** が「状態」や「存在」を表す **be** と共起する例は確実に存在し、とりわけ **be -ing** > や < 人 + **be** + 場所を表す副詞要素 > といった

パターンが **suddenly** と共起する文で多く見られる。また < **be** + 形容詞 > や < **there be NP** > といったパターンと共に **suddenly** が用いられている文の一部でもこれに該当するものがある。こうした例では「状態」や「存在」が突然であることは不自然であるので「ある物がある状態であること、あるいはある人や物が存在していることに突然気づいた」と解釈される。つまり **suddenly** には「認識の変化が突然であること」を表す用法があるということであり、本研究はコーパスから採取した数々の文例の分析を通じてこの点を確認した。

なお本研究は **suddenly** を分析したと言うよりも動詞、とりわけ動詞のアスペクトを分析したと言うべきではないのかと疑問に思う読者もおられるかもしれない。特に黒宮 (2017a) は確かにそういう側面を中心に議論を進めた。しかし筆者は本研究が動詞 (のアスペクト) の分析だとは考えない。文の意味とは様々な要因が絡み合っ成り立っているものなのであり、**suddenly** の意味を考える際には否応なく動詞やアスペクトのことについても考えなければならない。その複雑に絡み合った意味のうち、ここからここまでが **suddenly** の意味で、ここからここまです動詞が担っているなどとバラバラにして考えることなどできるはずもない。実際 **suddenly** と動詞とそのアスペクトだけで「状態変化と認識の変化のいずれが突然起こったのか」が決定できないことは、本稿 2.1 節で述べたことのみからも十分に理解できることだ。「存在」を表す **be** が用いられている文の主語 (つまり名詞) が表す意味、すなわち「存在するモノ」が < 音 > < 人 > かによっても **suddenly** の解釈は大きく変わる。名詞を無視してこの問題を考えることなどできない。名詞のみならず、文に含まれる語のそれぞれが一しかも相互作用しながらそれぞれの役割を果たしていると言っている。それどころか文の範囲を超えて、文脈まで考慮しなければ状態変化と認識の変化のいずれが起こったのか判断のつかないことも多い。それがコーパスが我々に教えてくれる言語の実態である。

したがって本研究は一『**suddenly** 考』というタイトルではあるが一 **suddenly** それ自体を単独で分析したものでもない。 **suddenly** がどのような環

境において現れ、そうした環境と相互作用することでいかなる意味を表すかについて考察したのである。しかも分析対象は初めから **be** と共起している **suddenly** に限定した。本研究が **suddenly** に焦点を当ててきたのは確かだが、相互作用によって生じている意味を全て **suddenly** に帰するつもりもなければ、ましてや **be** や動詞のアスペクトに還元するつもりもなく、それどころか **< be + suddenly >** のパターンに全ての意味を負わせる意図もない。上に述べたように文に含まれる語のそれぞれが文の意味の決定に関わっているのである。

そのようなわけなので、本研究が甘んじて受けるべき批判はむしろ、状態変化と認識の変化のいずれが突然生じたのか適切に判断するための決定的な要因を、結局のところ、文脈から掘り取れずに終わっている点にこそある。繰り返しになるが文の意味は様々な要因が複雑に絡み合って成り立っているのであり、少数の決定的な要因が存在すると想定すること自体が間違いなのだろう。とはいえ同時にまた、いずれの意味で用いられているのか母語話者は多くの場合は瞬時に判断しているというのも事実であり、そうであるからには、決定的とは言えないまでも主要な要因がいくつか存在しているのではないかとも考えられる。そこで本研究の採った方法は、コーパスの観察を通じて、その主要な要因の候補となりそうなものを極力拾い上げ、それによって母語話者の感覚に少しでも迫ろうとするというものだった。そして実際そうした要因の候補を紹介してきたつもりではあるが、結局のところは「物理的状态変化が突然生じることが自然な事態であるかどうか」に懸かっている、というのを結論とせざるを得ない。もう少し具体的かつ決定的な要因を提示したかったというのが筆者の偽らざる思いである。

これを今後の課題とさせて頂くことにして、今回はここでひとまず筆を置くことにしたい。

(完)

注

- 1) 念のため付言しておく、いわゆる「文修飾」、すなわち文全体を修飾する副詞が文頭に置かれることもある。
- 2) つまり (4a) は<音>の11例の中にも<視覚で捉えるもの>4例の中にも含まれている。重複して勘定することになってしまうがご容赦願いたい。なお全体の数が問題となるもの (suddenly が存在を表す be と共起する31例、there 構文と共起する22例、suddenly が there の直前に置かれている20例など) では (4a) はあくまでも1例として数えられており、重複していないことをお断りしておく。
- 3) ただしこれは<音>と認識の突然の変化とが結びつく可能性を否定するものではない。事実、黒宮 (2017a) で挙げた (1e) の例文は<音>と認識の突然の変化とが結びついている例だ。もっとも「音がしていることに突然気づいた」のではなく「音源が自分のすぐそばにあることに突然気づいた」ことを示している文なのではあるが。
- 4) なお「存在しないこと」を表しているのであれば「存在場所」それ自体も存在しないことになるので、そのような文では存在場所が示されないのが当然のように思われるかもしれないが、「<場所>に<存在物>がない」(例えば「テーブルにフォークがない」というのは自然な文であるので注意が必要である。
- 5) 黒宮 (2016) の注1でも述べたが、この例文の出典はアメリカの現代小説で、一人称の語り手が基本的に現在時制で出来事を語っていく体裁を取った物語である。文中の“asks”が現在形なのはこのためである。
- 6) この点に関して、大阪学院大学の R.D. Logie 准教授にこの場をお借りして謝意を表したい。
- 7) 行為者本人にとっては意図的な動作で突然でも何でもなくことでも、その行動を見て言語で表現する者にとっては突然だと感じられるというのはふつうのことであり不思議でも何でもなく。しかし我々は案外、他人の行動

であってもあらかじめある程度予測しているのかもしれない。もしそうであるならば他人の行動が突然だと感じられることはあまりないということになる。

引用文献

British National Corpus <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>

SGT = Raymond Carver, “A Small, Good Thing”, in *Where I’m Calling From*, New York: Vintage Contemporaries, 1989, pp.376-405.

SYH = Jo Knowles, *See You at Harry’s*, Somerville, Massachusetts: Candlewick Press, 2012.

参考文献

Comrie, Bernard (1976), *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.

黒宮公彦 (2016)、「suddenly 考 (1)」、『大阪学院大学外国語論集』第72号、pp.1-17.

—— (2017a)、「suddenly 考 (2)」、『大阪学院大学外国語論集』第73号、pp.49-64.

—— (2017b)、「suddenly 考 (3)」、『大阪学院大学外国語論集』第74号、pp.19-33.

On *suddenly*: Part 4

Kimihiko Kuromiya

This article proposes that the word *suddenly* has two senses, one which represents an instantaneous change of state, and the other describing a speaker's realization of a change of state that has already taken place before the utterance.

In Part 4 we will continue to verify the proposal above through observing some more sentences, taken from *British National Corpus*, where *suddenly* modifies <there + be + Noun>, <Noun + be + Adverbial Phrase>, etc.